
暗証番号、忘れました！

輝きのブライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗証番号、忘れました！

【EZコード】

N6138Z

【作者名】

輝きのブライト

【あらすじ】

『竜殺し』と呼ばれた、ザイフリートが終焉を呼ぶ竜、クログ＝ナーラを切り裂いた日から4900年。

世界は五つの地域に分かれ、それぞれが巨大国家を築いていた。

学校に入るにしろ、会社に入社するにしろ。

最初に見られるのは、こんにち、誰もが有する潜在能力、『暗証番号』。

『魔法』、『身体強化』、『自然』と三種類ある異能力。

能力のカテゴライズにより、身分が決まってしまう社会において、

『魔法』に覺醒できるかどうかが重要視されている。

学園全体の9割が『魔法』使い。

その中の一割である、鳥不無元親はそもそも、能力を所有すらしていなかつた！？

輪廻転生と異能力と身分制度そして、学園ライフ。

そんな世界をぶつ壊せ！

一枚目・プロローグ

遙か昔ヒンダルフィア城

満月が妖しく輝く、ある日ある夜。

真つ黒な半袖の「コード」が特徴の少し長めの紫色の髪を持ち、左耳に妙な形のピアスをして眼帯をした隻眼の賞金首・『隻眼のザリット』と呼ばれる、奇妙な腕輪をした青年が何も怪我を負っていない唯一見える残された左目を閉じて城のバルコニーの手摺に凭れていた。

「ザリット、来ているのか？」

「誰だオマーは？・・・ああ、ヒルダか」

ザリットが声をするまゝを向くと、隣には真っ白な長髪を持つ、どこか気品溢れる女が立っていた。

ブリュンヒルデ・ヒンダルフィア。

ヒンダルフィア王国の第66代目の王位繼承者である。

そして、『竜殺しのザリット』と呼ばれ、懸賞金66億シータをかけられているザリットの数少ない知り合いの一人であり、そして

恋愛関係にある。

当然、誰も賞金首と女王が密会していることを知らない。

「なんだはないだろ？・・・ホント、姿を消したりするのだけは病的に上手いな。」

「馬鹿言つてんじゃねえ。それじゃ、俺が馬鹿みたいじゃん

少々長い犬歯をむき出しにして、反論してみせるザリット。

ヒルダはそんな様子ですら愛おしこと言わんばかりに、自分より身

「長いザリットの手を握る。」

「……なんだ、自覚あるのか？」「..」

悪戯イタズラつぽく笑つて見せると、

「舐めてんのか？」これでも、自分のことは知つてゐるつもりだ

と、ザリットが不服そうに返した言葉を聞き、ヒルダは満面の笑みを浮かべた。

「まあ、自覚があるだけないよりマシだがな。ザリットさゆうでないと、ヴァルキリー戦乙女ヴァルキリィなんて呼ばれた名がすた廃るな」

「お、俺をヴァルバラに連れて行くのかよ！？」

焦るザリットを見て、ヒルダは上目遣いでザリットを見上げる。どこか、小悪魔な表情で。

「誰がそんな」とすると思つていてる？海龍王、炎竜王から助けてくれた、愛しの竜殺しに」「

「・・・全部、『冗談だ』というのか？」

「そんなどころだ。いい加減、氣づいたりだつだ？」

そして、ヒルダはザリットを強く抱きしめた。

まるで、消えそうな幻影をかき集めようとするかのように。

「こつでも。」「・・・今度はいつ、来てくれるんだ？」

即行そつこうでケロリとした表情で答えるザリットに少々困惑した表情を浮かべつつ、ヒルダは少しだけ頬を紅潮させた。

逆に生活費はどう稼いでいるのだろう、と疑問が生じて仕方が無かつたが。

それでも、ヒルダは嬉しかった。

そして、誓う。

たとえ、世界を敵に回してもザリットだけは裏切らない。

そんな風にヒルダが考へているのを知っているのか知らないのか、ザリットはこつん、と額を当てる。

「だーいじょぶだつて。俺は超絶無敵天下無双のザイフリート様だからなー！」

胸を張るザリットを見て、微かに涙を浮かべつつ、ヒルダは愛しの賞金首に告げる。

「・・・馬鹿ザリットのくせに、身の程みほどを知れ」

* * *

10年前

* * *

ある公園で。

そこで一人の子供が遊んでいた。

一人の少年は黒曜石のように黒い髪とルビーのような瞳を持つていて、一人の少女は太陽に輝く、西洋人形のような金色の髪と眼も眩みそうな金色の瞳を持っている。

容姿を除けば、仲の良い二人が遊んでいるようにしか見えないだろう。

だが、少年の左手首から肩まで伸びる、黒と赤だけを用いて、描いた模様がある手袋。

あどけなさの残る、その顔には似合わない長めの手袋。

それだけを見ると、第三者は『何故、手袋をしているんだろ？』と怪しんで怪訝そうに田を向けるだけで近寄ることはしないだろう。しかし、金髪の少女は違った。

少年が左手首から肩まで伸びている手袋をしていても疑問に持つことは無く、こうして遊んでいる。

「もとちかくん、知ってる？」

「何を？」

「クログ＝ナーラだよ」

「なにそれ？」

「あはは、知らないんだねー。せんがくひさいにもほどがあるなあ。クログ＝ナーラってのは・・・」

黒髪赤眼の少年 もとちかは知らないのかよ、と苦笑した。

しかし、その直後だった。

金髪長髪で金色の目を持つ少女 ちやわきは愉快そうに笑い、ジ

ヤングルジムの一番上に上がった。

もとちかは「横暴だよねえ、ちさきちゃんば。」とボソリと呟く。周囲から「地獄耳」と呼ばれる、ちさきには聞き取れてしまった。

バシッ！

「あはは、手がすべっちゃったなあ。もつちーが悪いんだよ？残念だよねー、ホント。もつちーが知らないんだろうなー、というぜんていで話してあげようとももつてたのに。」

「いや、実はしつひ……」

バシッ！バシッ！

もとちかが次の言葉を紡ぐより先に、ちさきの手が出ていた。

もとちかには何が起きたか分からなかつた。

ただ一つ分かるとすれば、ちさきが怒っているといつのだけが分かつた。

「あの、、、、ちさきちゃん？」

「なに？馬鹿もつちー」

先ほどから使用される呼称・『もつちー』。

主に、ちさきが機嫌がよかつたり機嫌が悪かつたりする時にちさきが使用する。

ちさきの感情の変化（というか、周囲の人間の感情変化そのもの）を読み取るのがもとちかにとつては苦手な為、どうすればいいか分からず、行つたり来たりを繰り返していた。

行つたり来たりを繰り返していると、ちさきはジャングルジムから降りてきた。

降りてきたとき、ちさきは手を後ろで組んで、見事な装飾やうじょくが施された腕輪うわんわんを隠し持っていた。

「・・・ もつちー。」

「なに? ちさきちゃん」

「ゆるしてほしー?」

「どうか、クログ＝ナーラの話がしたい」

バシッ！ ゲシゲシッ！

ちさきは顔を真っ赤にしてもとちかを殴っていた。

今度は回し蹴りと裏拳で。
どうやら、もとちかの鳩尾みぞおちにクリティカルヒットしたらしいへ、もと
ちかは鳩尾を押させていた。

「い、痛いよ、ちさきちゃん！ いくらなんでも、まわしちりとうり
けんはないよ！」

「わかつてないね、もつちー。違うよ、これは・・・ あいじょうひ
ょうげんだよ」

「え？ ちさきちゃん、なんて？」

ちさきがボソリと呟いたのに、もとちかは気付かなかつた。
ちさきはじれたそうに頭を搔き鳴ると、ちさきはそっぽを向きな
がら見事な装飾が施された、腕輪うでわを差し出した。

「ちさきちゃん、「レナ」に？」
「呪いの腕輪。」

「はー？」

「まあ、もつちーは知らないくて良いか。」

「そんなこと言われると、かなりはらたつよー。」

「・・・ いるの？ 要らないの？」

「・・・ 要ります」

もとちかはちわきの手の中にある、見事な装飾が施された腕輪、呪いの腕輪を受け取り、試しに右手首につけてみる。

「へえ、にあつてるじゃない。まるで、どれいみたいね。」

「ほめられてるのか、わかんないよ・・・」

「ほめてるのよ、もっちー」

「ロロロと笑う、ちわきを見てもとちかはただただ苦笑するだけだつた。

* * *

春原暗番制御学園市

左目に医療用眼帯をつけた、紫色の髪と左手にしている赤黒い手袋が特徴的な鳥不無元親は追っ手を逃れるべく、街中を走っていた。

「クソツ、なんでアイツら、春原の敷地内から出てもなお、追いかけてくるんだよ・・・！」

鳥不無の追手。

それは

「「待て待てッ！不要アクセサリー持込み、制服着崩し等の咎で、高等部一年で自然系の鳥不無元親、お前を春原暗番制御学園風紀委員会委員長、鷺橋八汰の名の下に貴様を捕獲し、委員長に褒めて貰いたい次第であるー」「

追手。

それは、春原暗番制御学園の風紀委員会の男衆である。
ヴァルハラ

妖艶な雰囲気を持つ、委員長・鳶橋ハ汰。

その権限は生徒会長を超えるとされ、敷地が日本の関東地方と同等のヴァルハラで『ヴァルハラで絶対に敵に回してはいけない生徒』の一人とされ、『ヴァルハラ三大美女』の一人でもある。

『暗証番号』^{パスワード}と呼ばれる、個人によつて潜在能力が基本的に違つ、社会において如何に希少価値のある能力に目覚めるか?』

それが、ヴァルハラこと異能制御方法習得学園の目標であり校訓でもある。

ヴァルハラは五大地域の巨大国家の中の制御学園の中で、主に『身体強化』^{ツバード}、『魔法』^{マジック}、『自然系』^{ルラチナ}の三種類ある暗証番号の一つ、『魔法』^{マジック}使いを育てるこ^トに力を入れている。

ヴァルハラにおいて、『魔法』^{マジック}に目覚めたものは『顛履』^{ひいき}され、逆に『身体強化』や『自然系』に目覚めた生徒に対する風当たりが悪い。

しかも、『魔法』^{マジック}に目覚めるのはほんの一握り(教師含む)ため、『魔法』^{マジック}使いのみが国を治めたり出来るため、かつて『きぞく』と呼ばれた身分となり、『暗証番号』^{パスワード}の系統によつて、一種の身分差別が出来上がつていて。

そして、ヴァルハラには全体の9割が『魔法』^{マジック}に目覚めている。

つまり、その教師陣からの風当たりが悪く、その残り一割が風紀委員会に追われている、鳥不無なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6138z/>

暗証番号、忘れました！

2011年12月20日17時52分発行